

「わたしたちの国籍は天にある」

詩篇
ピリピ人への手紙

第24篇1節～6節
第3章17節～第4章1節

説教 岡村 恒牧師

「わたしたちの国籍は天にある」(20節)。喜びの書簡と呼ばれるピリピ人への手紙は、その喜びの根拠を高らかに語ります。この御言葉を、多くのキリスト者は葬儀で耳にします。あるいは愛する者を墓に葬る日に、その人を記念して祈りを捧げる時に、この御言葉を聞きます。

「天」とは死者の国ではありません。天というのは神の王国、神の支配を表す言葉です。神の力だけが一切を覆い尽くしていて、死も滅びも悲しみも私たちに何ら危害を加えることは出来ない、本当の命が溢れる場所です。神の力、神の恵み、神の平安、神の癒しだけが私たちを包み込みます。だから、死の眠りに就いた者は、神の国の到来を待ち望むのです。

地上では、私たちは旅人であり寄留者です。私たちは、人生の途上で、様々な出来事を通して、この地上にあるものは簡単に崩れ去ることを思い知らされます。地上のどこを探しても、私たちの魂が本当に寛ぎ安らぐ場所などありません。私たちは、それぞれ自分の人生の意味や目的を捉えたいと思い歩んでいます。しかし、それが本当に確かな人生であり、目指す所が確実な終着点なのか、あなたが帰るべき場所はどこなのか、聖書は繰り返し私たちに問いかけます。パウロは、何とかして一緒に歩んでほしいと願い、祈り、語りかけて来た多くの人々が、本当の目的から逸れてしまっているのを見、彼らの最後は滅びであると涙を流して語ります。

彼らのことを祈りつつ、しかし自分たちに与えられた主イエスキリストの約束に心を向けると、「しかし、わたしたちの国籍は天にある」この喜びに満ちた叫びが溢れ出て来るのです。主にあっていつも喜びなさいと呼びかけずにはいられないのです。たとえ地上の旅でどんな痛みや悲しみがあっても、私たちは主にあって喜びながら歩むことができるのだと語ります。

やがて終わりの日に、主イエスキリストの言葉を借りると、父の元でのすまいの用意が出来た時、そこに主はご自分の民を迎え入れて下さいます(ヨハネによる福音書 14章1節～3節)。テサロニケ人への手紙によると、天使のラッパを合図にして、キリストが到来して、眠りに就いた者が最初に引き上げられ、空中で主と会い、そして後に、その時生きている者が引き上げられ、栄光の姿に変えられて、用意された場所に帰ります(テサロニケ人への第一の手紙 4章13

節～18節)。私たちは、決して神の御心に適わない、値打ちも資格もない卑しい姿をしていながら、ただ神の愛によって、主イエスキリストのあがないによって、神の国に迎え入れられるのです。

新共同訳聖書では、20節の「国籍」を「本国」と訳しています。本国が別にあって旅をしている者には、大使館という特別な場所があります。大使館は本国の薫りを放つと言われます。教会は神の国の大使館です。私たちは日曜日ごとに教会で本国に思いを向けます。神によって、私たちの魂に《自分が何者か》という真実を刻み付けて頂くためです。復活して、今も生きておられる主イエス・キリストの霊が、私たち一人一人に注がれ、主の約束が今も生き生きとした命のある約束であり、死はもはや私たちを滅ぼすことが出来ないことを心に刻みます。

この教会には、多くの信仰者の祈りの蓄積があります。後に続く者が、神の国の約束を聞いて、神を信じて、本当の希望を抱くようにという人々の祈りと本国を思う熱い思いが染み付いています。

キリスト者は、洗礼を受けた時に、その名が命の書に書き記されます。誰でも御子を信じる者は、一人も滅びないで永遠の命を得る、これが聖書の約束です。死んだ者が皆神の前に立ち、神の民とされている者が永遠の命を味わい知るのが天です。主が来られ、新しい天と新しい地がまたたく間に実現をすると聖書は言います。誰でも、主イエスキリストを救い主と信じ、天に国籍を持つことを心から願い、神の子の約束が確かであることを受け入れる者は、その日を心待ちにして良いのです。

まだ洗礼を受けておられない方、幼児洗礼を受けた後、信仰告白をしておられない方は、是非ご自分に問いかけて下さい。いま終わりが来て良いのか、主の時がいつ来るか、それを思う時、祈り始めて良いのではないのでしょうか？先に召された者、先に救いに入れられた者は、あなたのために祈り、あなたの傍らで支えます。主はあなたに信仰を与え、洗礼の道を開き、あなたをご自分の民に加えて下さいます。そして、心からの希望を持って、終わりの日を待ち望めるように、あなたを創り変えて下さるのです。

(記 説教要約奉仕者)